

高 退 教 通 信

- 2014年 4月号(2014・4・1 発行) -

鹿児島県高等学校退職教職員会

事務局 県高教組内

鹿児島市山下町4-18 《099-225-1414》

発行責任者 長井 玄龍

編集責任者 永田 琢朗

ヴィーナスの涙

河野 達人



の複製画の中央でしばし揺れていた。

芸術は創造と破壊の繰り返し、変遷する芸術の美に感応する力を無くしていた。とどめを刺されたのは、ある作家の水玉模様の作品だった。これが芸術？理解不能のボクは芸術から逃げた。教壇を去る潔さも無く、定年までの年月を数える毎日だった。

いま美を享受する側にいて、巷の文化状況にも違和感がある。美は快感を与えるものと定義する古典的美学に洗脳されているのか、平和の基盤が脅かされているためか、時代を享楽する文化の表情に不快

を覚える。耳に鼻に唇に何個もピアスしているのは傷ましく、付け睫毛にはゾーッとする。これは一部の例で、何よりも気になるのは多くの人に認知されている「美的な」ものだ。

園芸店に行くと、原型の特殊性を失った花々が、きれいに装い客を待つ。花卉は複雑に縮れ、けばけばしくてショッキングに、バラ、シクラメン、フリージャ、グラジオラスまでもが、花の命である新鮮さと透明感を失って微妙な色や形の違いを競う。原種も消滅させつつある品種改良に正義はあるのか。「美」にあらず」と言うものなら、美の原理主義者と非難されることだろう。この疎外感は、脱原発論者の孤独に似ている。だからいまボクは道端の草花に心を寄せヴィーナスの涙を想う。

定年退職して11年になる。過去を消したいほど教師不適格者だった、という後ろめたさは増幅するばかり。美術教師だったボクは、＜新しくなければアートではない＞と謳う現代芸術の表情に翻弄されていて、理解不能の芸術の前で美術教師であることの罪責に悩まされていた。

「美の普遍性」を信じ、自然美をもとに構築していた美術教育の理念も崩れかけていた。言葉を失った初老の田舎教師は、授業が終わるとぐた一となって教卓に顔を埋める日が多くなっていた。

ある日、眠気の中にあの両腕のないヴィーナスが現れた。始業のベルが鳴り一瞬に消えたのだが、腫が潤んでいるように見えた。美の女神の残像は、正面の壁に掛けられた「ゲルニカ」

上山陸三(元高教組副執行委員長)



一黒焦げの少年を忘れまい一

私は短歌を詠まないが、字余り、字足らずを十分承知の上で、短歌風に次の駄作を一首詠んでみた。

黒焦げに炭化せし少年を忘れじと反核運動 30 年を経つ

黒焦げの少年が、代表としての私を 30 年に亘り反核運動に駆りたててきたことは言うまでもない。

すでに紹介したが、私は初めてナガサキの「原爆資料館」を訪ねた時、原爆で一瞬に黒焦げに炭化した少年の姿(写真)を見た時、「自分の子供たちを、教え子たちを、日本中の、いや世界中の子供たちを二度とこのような残酷な姿にさせてはならない」と自らに誓い、核廃絶運動に立ち上がる決意をしたのだった。その時の思いを込めて、30 年間続けてきた反核運動を振り返り、上記一首を詠んでみた。

一読者の先輩・後輩に感謝一

いよいよ私の「反核運動 30 年を振り返って」の連載も終わりに近づいたが、経過記録の多い退屈な読み物に付き合ってください高退教の先輩・後輩の皆様は改めて心から感謝申し上げたい。今一つお願いしたいことがあります。

以下に紹介する 30 周年記念祝賀会に寄せられて北海道と福岡在住の「大隅市民の会」会員二人のメッセージと、私が体験した悲話について、ぜひご一読をお願いします。この部分だけでも読んで頂ければ有難いです。

一「大隅市民の会」拡大世話係り会開催一

2012 年 1 月 16 日

- 場 所：鹿屋市寿 7 丁目公民館
時 間：午後 6 時～8 時(あと懇親会)
- 参加者：岩田都詩夫・上山始・上山千代子・上山四朗・上山陸三・上山洋二・本地博・道下勝 前田通明・松下徳二(以上 10 名)
- 議題：① 「大隅市民の会」結成 30 周年記念祝賀会について
② 「3・11 東電福島原発事故」と「脱原発」運動について
③ 「川内原発廃炉を求める訴訟」の参加について

一「大隅市民の会」30 周年記念祝賀会及び東電福島原発事故 1 年を振り返る集会一

2012 年 3 月 11 日

私たち拡大世話係り会員は 30 周年記念祝賀会の会場作成を前日に済ませた。会場の四周の壁や窓には至る処、30 年間に亘り使用してきた歴史を刻む様々な横断幕を張り巡らせ、会員及び来賓の参加を待つことにした。横断幕は 30 年間の活動実績を如実に示すもので、会場を壮観なものにしたように思う。

では、以下、当日の日程・場所・会順だけを記し、個々の説明はそのあとに付加することにする。

- 場 所：鹿屋市寿 7 丁目公民館
時 間：午後 5 時～9 時頃まで
参加者：83 名
- 会順
 1. 開会のあいさつ 《事務局長 前田通明》
 2. 黙祷(東電福島原発事故並びに東日本大震災の犠牲者の霊に)
 3. 代表あいさつ (30 年間の経過報告も含めて講話) 《代表 上山陸三》
 4. 来賓あいさつ
 - ① 女性(母親)代表 《横井さくらさん》

- ② ハンセン病問題の全面解決をめざし
「ともに歩む会」《代表 松下徳二さん》
- ③ くろつち会(鹿教組退職者組織)
《代表 上藺紀夫さん》
- ④ 高退教大隅支部《代表安松良和さん》
- ⑤ 鹿屋に米軍はいらない女性の会
《代表 坂元美津子さん》
- ⑥ 大隅ブロック平和運動センター
《代表 津曲進さん》
- 5. メッセージ朗読
《世話係会員 福田陽一》
- 6. バイオリン演奏

- 《鹿屋オーケストラ所属 前田淳史さん》
- 7. 乾杯(あいさつを含めて)
《副代表 上山始》—交流会—
- 8. 参加者、会員並びに来賓による 3 分間スピーチ
- 9. 全員合唱
《アコーデオン伴奏 中野真由美さん》
- ① タンポポの歌 ② 原爆許すまじ
- 10. 閉会あいさつ
《世話係会員 岩田都詩夫》
- 11. 団結ガンバロウ
《事務局次長 上山四朗》

一北海道（札幌市）福岡市在住の二人の会員から寄せられたメッセージ

代表の経過報告と講話及び来賓あいさつから、その内容を簡単にでも紹介すべきだと思いが順

序を飛ばして、メッセージと悲話から先にさせてもらいます。

1、北海道より 札幌市在住 ^{おおさがみつる}大佐賀美弦さん(岩見沢東高校教師) 2012年3月11日

反戦・反核・平和運動をすすめる大隅市民の会」の皆様、30 周年おめでとうございます。雪深い札幌の地より連帯のごあいさつを申し上げます。

私は札幌市在住で高校の教師をしている大佐賀美弦と申します。今から 30 年前、毎日新聞「読者の声」欄に上山陸三先生が投稿された一文を読み、我が意を得たりと言う事で、早速、賛同し「地球から核兵器をなくそう」のステッカー運動に北の国から参加させて頂きました。当時、ヨーロッパを主戦場に米ソ両国が限定核戦争を起こす可能性が高まり、西ドイツ(当時)から始まった反核運動が世界中に燃え広がっていました。そんな時、上山先生を代表とする「大隅市民の会」の運動に出会いました。以来、若輩の私と長きに亘りお付き合い下さり、文通で皆様の活動内容を伝えて頂きました。息の長い大切な運動だと思ってきました。大隅半島の一角で燃え続けている小さな反核運動とは言え、決して意味のない運動とは思いません。なぜならこのような核廃絶運動をすすめ、支えている皆様のよ

うな人達たちがいるからこそ、人類は核による破滅から免れ少しずつであっても、着実に平和な世界へ向かって歩んでいると確信するからです。

昨年の「3・11 福島第一原発事故」により、私たちは核兵器だけでなく原発による人類破滅への危機に直面させられています。皆様がこのたび新たな運動として、「地球から核兵器も原発もなくそう」という反核運動に再出発されたことに大賛成です。上山先生に早速お送り頂いた二枚の新しいステッカーを車と家の玄関へ張り、札幌の地からまた参加させて頂きます。

北海道には、泊原発 3 号機が稼働中ですが、これを中止に追い込むため私たちも脱原発運動を起こしています。共に頑張りましょう。

最後に、上山先生を初めご高齢の方々が多いと思いますが、これからも健康に留意下さり、力強く、希望を持って、子や孫を核から救うために運動を続けてください。私も会員の一人として応援を送り続けます。皆さまのご活躍とご盛会をお祈りし、メッセージと致します。

2、福岡より 福岡市博多在住 井上健さん(福岡市役所勤務 同市職労三役)

「大隅市民の会」代表上山陸三様及び会員の皆さまへ「反戦・反核・平和運動をすすめる大隅

市民の会」が 30 周年を迎えられたことを心からお慶び申し上げます。

私は、「地球から核兵器をなくそう」のステッカーを郵便で取り寄せ、それが縁で上山代表とは手紙や年賀状のやり取りで交友させて頂いている福岡の一市民であり、また名ばかりですが「大隅市民の会」会員にもさせて頂いている者です。

本来なら当地にも「福岡市民の会」の様な市民団体を組織し、反核ステッカー運動に取り組むべきだと思ったのですが、当時若輩だった私は組織能力を持ち合わせず、細々と周囲の知人に協力を求めたのです。

このたび、「大隅市民の会」では、「福島原発事故」に直面し、核兵器同様原発も人類と共存できないと断じ「地球から核兵器も原発もなくそう」との新たなステッカー運動に取り組みれたそうですね。大賛成です。実は早速、私も先日ステッカーを送っていただき、車と家の玄関に貼って運動に参加しています。

—故人との初対面(悲しい私の体験より)—

私はこの連載の第1回目に、山形県新庄市にある中学3年生の庄司千賀子さんから、私どもが協力している湯川秀樹博士夫妻提唱の核兵器全廃の署名運動に参加させて欲しいとの手紙が寄せられ、100名を超える署名と立派な手紙が届いたことを紹介した。

以来、私は彼女に自分の教え子に対するような気持ちで私たちの核廃絶運動について、手紙で伝え続けてきた。それは25年近く続いた。この間、彼女も私の手紙に毎回応えてくれ、反核ステッカー運動にも協力してくれた。

私が今も忘れられないことは、彼女は達筆家で、文章も上手で、誠実で立派な人柄であったことである。

彼女は高校卒業後、山形大学へ進学し、そこを卒業後、さる会社に就職し、やがて結婚して一子(娘)をもうけた。3歳の時の可愛い娘さんと一緒に写した母子写真も送られてきた。幸せそうな家庭生活を送っているように見え、私もぜひ一度会ってみたいと思っていた。それから数年後、乳癌に侵され治療中との手紙が届き、私は見舞状を何回か書き送り、一刻も早い快癒を祈った。ところが2006年、彼女の実家から彼

ともあれ、30年間の長きに亘り、地域に根差した、反戦・反核・平和を希求する運動が続けられ、さらに、核の平和利用も否定する取り組みに進まれた「大隅市民の会」及び会員の皆様に共鳴し、敬意を表します。

東日本大震災とこれに伴う福島原発事故から1年を経た今日3月11日に開かれる30周年記念祝賀会と脱原発集会が盛会のうちに終わることを切望します。そしてこの記念集会が、新たな決意を固める機会となり、「大隅市民の会」がさらに発展することを期待し、皆様のますますのご健康を祈念します。

人権を生涯のテーマとする福岡の一市民 井上健より 2012年3月11日

(この他にも東京、山形県酒田市、鹿児島県内などから数名の方からメッセージ、祝電が寄せられましたが割愛させていただきます。)

女が急逝したとの知らせが届いた。乳癌で、よもや亡くなるとは信じられず、私は即刻、実家に電話すると、母親に臨終までの経過を伝えられた。私は非常なショックをうけ、哀悼の言葉もそこそこに電話を切り、悲しみに沈んだ。その時、できれば葬儀に出席したいと思った。しかし、たまたま体調を崩しており、一先ず弔電だけを送ることにした。その後ずっと、私は彼女が文通で核廃絶と恒久平和を切望し、私どもに熱い声援を送り続けてくれたことに想いを馳せ、哀惜の情に浸った。そして遂に、意を決し、翌2007年11月、山形の天童市(新庄市より転住)の実家を訪ね、故人の霊に報いることにした。

私を迎えてくださったご両親は、温厚篤実で、親切な人柄で、在りし日の千賀子さんを髣髴とさせた。

私は霊前に案内されると、「雪深い山形の地から上山先生たちの核兵器全廃の署名運動に協力します。・・・」と彼女が最初に書いてくれた手紙を持参していたので、それを懐から取り出し、後ろに坐しておられたご両親に事情を説明しながら、仏壇に立て置かれた故人の写真の前に置き、彼女と初対面した。とっさに私は「千賀子

さん、生きているうちに会いたかった。どうしてこんなに早く逝ってしまったの・・・」と声を詰まらせ、呟き、焼香すると、どっと涙が溢れてどうしようもなかった。

私の無念の思いを察してか、母親が「先生、別の部屋に参りましょう」と言い、応接間へ案内された。紙幅の都合で、詳細は省くが、そこで、母親は娘に先立たれた深い悲しみのいまだ癒えぬ心境と娘が苦しい闘病に耐え、静かに息を引き取った様子を、ときに涙を浮かべ、話し

て下さった。話を聞きながら私も胸が塞がる思いに包まれた。

その夜、私は立派な温泉旅館まで用意して頂き、思いもよらぬ温かい歓迎を受けた。

翌日私は、朴訥で好人物の父親の運転で、母親孫娘三人に山形駅まで送ってもらった。

新幹線のプラットホームで、手を振りながら見送って下さった、優しく上品な千賀子さんの母親の姿が今も脳裏に焼き付いている。

—酒田市在住の管幹雄さんとも再会—

私は上記悲話の概略を 30 周年記念祝賀会の講話で紹介し、不覚にも涙で喉を詰まらせてしまった。

ついでに述べると、1985 年 1 月、札幌市で開かれた、日教組の全国教研集会の平和分科会で知り合い、以来「大隅市民の会」会員になってもらい、文通で交友を続けてきた酒田市在住の管幹雄さんとも再会を果たしてきた。

管さんは酒田駅で私を出迎えてくれ、久しぶりの再会を喜び合い、その日、早速、最上川下りに

誘ってくれた。私は遊覧船から兩岸の山々と川面に映る紅葉の絶景を堪能しながら、思わず、芭蕉の「五月雨をあつめて早し最上川」を口ずさんだことである。その夜もご夫妻に暖かい歓迎を受けた。二人とも日教組組合員であり、心おきなく教育や組合活動などについて語り合えた。私は組合活動を通じてこんな遠隔の地まで仲間を持ち、友情を結べたことは組合活動の賜物だと感謝せざるを得なかった。

(続く)

お知らせ 上山先生のこの連載が 2012 年の 1 月号から始まり、今月号で 11 回目を迎えました。当初は 2～3 回のもりでしたが、このように長い連載になるとは、当時編集に関わっていた私(長井)は勿論、当の上山先生も予想されていなかったと思います。次号で最終回を迎えますが、この連載が元になり、「大隅市民の会」の具体的な活動も加筆され、4 月頃に単行本として発刊されることになりました。

2014 年度・高退教定期総会・懇親会への参加案内

期日 6 月 28 日(土) 受付 9:30 定期総会 10:00～12:30
懇親会 12:30～14:30 (参加費 2,000 円 当日会場で徴集)
場所 ジェイドガーデンパレス(鹿児島市上荒田 19 番 1 号・鹿児島市立病院建設地近く)
電話 099-257-1211
講演 「憲法改悪にどう抗するか」(仮題) 講師: 杉原洋さん(元南日本新聞記者)

同封のハガキで参加申し込みをお願いします。4 月 18 日(金)までに投かんください。

2014 年度会費納入のお願いについて

高退教の会計年度は、4 月から翌年 3 月までです。2014 年度分の会費の納入をお願いします。年会費は 2000 円です。同封の振込用紙でご送金ください。高教組書記局に持参されても結構です。ただし次の方の会費は免除になりますのでご注意ください。

★ 80 歳以上の会員。

★ 再任用や期限付きで、高教組の組合費を納めている会員。

口座番号 20268 記号 020708 加入者名 鹿児島県高等学校教職員組合

ゆうちょ銀行のカードで振り込むと、振込手数料は無料です。

「人権差別のヘイトスピーチを許してはならない」



高退教副会長・平鉄臣

言を繰り返し、サッカーゴールを倒すなどのヘイトスピーチや野蛮行為を行った。その模様をビデオで見たが、およそまともな人間とは思えない言葉使いや恐怖を与える行為は、学校というところでやるべきではない。事前に支援のため父母や卒業生も学校に来ており、教職員の指示で、できるだけ児童の目に触れないようにしていたため、泣き出す子もいたが全体としては大

はじめに

県護憲平和フォーラム主催の標記の集会が「建国記念の日」に黎明館講堂で行われた。集会では、「彼・彼女らは何と闘ったのか～京都朝鮮学校襲撃事件から考える」と題して、ジャーナリストの中村一成さん(写真＝下)の講演があった。中村さんは、在日朝鮮人や難民を取りまく問題、死刑などをテーマに取材、執筆活動をしている方である。

主催者の荒川譲代表はあいさつの中で「これまで現職首相が民間団体主催の奉祝行事で祝辞を述べることはあったが、安倍首相は今回初めて建国記念の日に合わせて愛国心を訴える談話を発表した。向こう側はそこまで攻め込んできている。これをどうはね返すかが今後の課題だ。」と訴えた。

講演内容と感想



09年12月4日、京都市の京都朝鮮第一初級学校に「在日特権を許さない市民の会」のメンバーら11人が押しかけ、1時間に亘り「密入国の子孫」などと罵詈雑

事には至らなかった。この襲撃犯は、学校側の刑事告訴や街宣差し止めの仮処分申請も無視して、都合3回の差別街宣を強行した。現在威力業務妨害で主犯格には有罪判決が確定している。

このような行為に対して、警察もきちんと取り締まっていけないし、市教委も児童のメンタルに対する対策も取っていない(管轄外だから?)。諸外国ではこの事件を大きく取り上げている。古い話だがオリンピック選手がツイッターで韓国人差別の発言をし、それに対して反論が続出、ついに彼女はオリンピックに出場できず国に帰されたという。このような例はヨーロッパでは枚挙に暇がない。いろいろな人がいる社会では、法律で差別を禁止するのは当たり前である。

ところで、なぜ今頃このような言動が日本では許されるのか。70年代から80年代にかけては日本の労働組合や革新勢力も一定の力があり人権も守られていた。しかし90年代以降それらが弱くなり、ついに石原慎太郎・元東京都知事は「不法滞在している第三国人が凶悪犯罪を起こしている」旨の発言に至った。それに対してきちんとけじめをつけられず、以後、朝鮮・韓国人に対する差別発言が相次いだ。ヘイトスピーチが許される土壌がここにある。現在鹿児島ではヘイトスピーチは起こっていないが、もし起こった時、私たちはどう振る舞うのか。公的な弾圧も含めて、私たちができること、やるべきことは何かを考えておかなければならない。

2013 年度 退職者を囲む会

2013 年 12 月 6 日(金) 17:00～ ホテルウェルビューかごしま

13 年度の高教組組合員の退職者は、定年 17 人・若年 1 人の 18 人です。今年度の退職者も採用が少ない年度でした。ご退職の先生方ご苦労様でした。ご退職まで高教組の組合員として頑張ってこられた皆様に敬意を表します。

「囲む会」は例年 3 月に行っていましたが、退職予定者の出席しやすい日程という事で、各福利厚生団体の退職予定者説明会が行われた夜に実施されました。既に厚生年金・共済年金ともに 65 歳支給開始になっており、この 5 年間は再任用などでの不安定な就業形態かつ減額給与での生活を余儀なくさせられます。定年延長が望ましい雇用条件ですが、民間との兼ね合いや財政状況などを理由に我慢を強いられている状況にあります。第 2 次安倍政権発足以来、日本は急速に「戦争をする」国に変貌させられつつあります。高退教は労働組合でも政治団体でもありませんが、現職の高教組の運動を応援し、また全国の退職者・高齢者団体と連携しながら、民主教育、反戦平和・脱原発、年金・高齢者医療制度改善などのとりくみを行っています。引き続き緩やかですが一緒にスクラムを組んで欲しいと思います。



2013 年度の「囲む会」は、退職予定者 11 人、現職組合員や高退教会員(14 人)の参加者など、合計で 67 人の出席者で、退職者へのねぎらいと、第 2 の人生のスタートをお祝いしました。退職者から限られた時間でしたが、30 数年間にわたる教職生活を振り返って、悲喜こもごも

2013年度 退職者を囲む会

「生涯一教職員」の一念で

鹿児島県高教組



それぞれ最後まで高教組の組合員であった誇りと、ユーモアあふれるスピーチがあり、終始和やかな雰囲気の中で行われました。

今年度の囲む会の日程が例年と変わり、高退教通信で皆さまにお知らせすることができませんでした。来年度以降も 12 月第 1 金曜日が例年福利厚生団体の説明会が実施されていますので、それに合わせて開催する方向との事ですので、高退教通信 10 月号に間に合えばお

知らせしますが、確実な日程は本部書記局にお問い合わせください。

2013 年度の退職者のお名前は表のとおりです。

開 陽 通 信	鶴 窪	耕 二
鹿 児 島 南	前 村	省 二
串 木 野	浅 海	美 知 子
指 宿	鎮 守	喜 美 子
加 世 田 常 潤	吉 村	栄 治
山 川	山 田	英 幸
出 水	竹 之 内	嘉 幸
川 内 商 工	日 高	明 仁
伊 佐 農 林	永 井	茂 子
加 治 木	備	高 磨
加 治 木 工	寺 迫	一 典
福 山	向 井	正 樹
岩 川	颯 川	司
志 布 志	山 下	悦 子
志 布 志	小 島	照 美
奄 美 定 時	田 代	秀 樹
大 島	山 田	摩 理 子
開 陽	堂 蘭	真 由 美

自然とふれあって

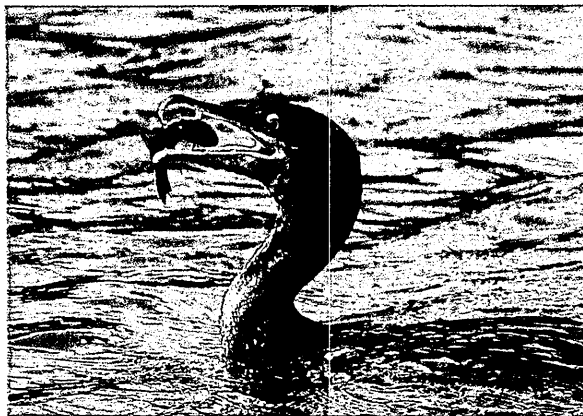
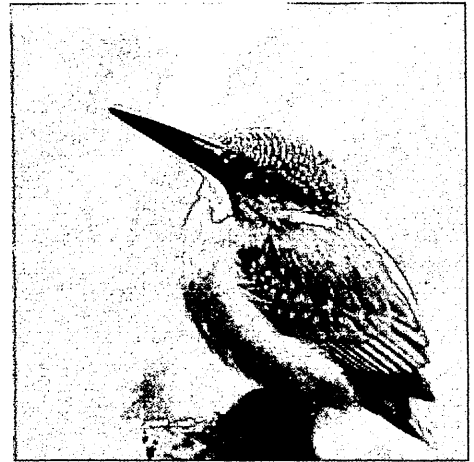
南 清 喜

早いもので退職五年目に入りました。退職 4,5 年前から辞めたら自宅に金属工房を造って好きな物作りを始めようと構想を練っていました。

近づくにつれ本当に自分のやりたいことは何か、本当に続けられるか等と考えるようになり、若い頃から好きだった写真撮影に絞り在職中にカメラを購入少しずつ撮影するようになりました。

子どもの頃にドジョウや小鮒が小さな小さな川にうようよいいた。その光景も遠い思い出になってしまい、自宅を構えてから故郷の自然が気になっていました。

撮った写真を埋もれさせずホームページで紹介し、少し自分の思いを書いてみよう、ソフトを購入 3 か月ほどかかってやっとの思いでHP「伊佐市の自然」を開設出来ました。



伊佐市内の暮らし、行事、野鳥等をこれまで七万回程シャッターを切っていると思います。パソコンで編集しながら現在データとして保存されているのは約三万枚程です。

野鳥撮影と言っても日々の観察が八割です。何処に、どんな時間にその野鳥が活動しているかが分からないことにはテントに入れません。特にヤマセミ、カワセミは魚のいる場所で捕食しますからその場所を探すところから始まります。その場所がまた撮影しにくい所が多いのです。太陽との関係で午前むき、午後むきと言う具合です。餌場で猛禽に襲われないよう細心の注意を払いながら、雨の日も風の日も捕食し、ひなを育てるため一

所懸命生きている姿には心打たれます。

近年田舎の河川もコンクリート化され魚が卵を産みにくい環境へと変わりました。人間は効率優先で、暮らしに直接関わらない価値外の生き物として殆ど関心を持ちません、やがては大きな損失となるのでしょう。

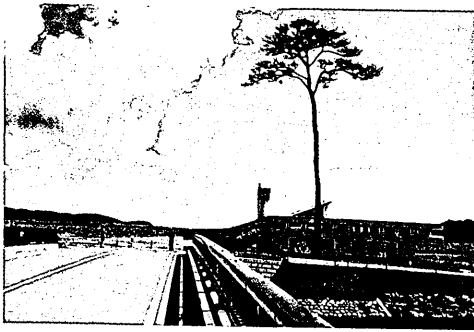
自然への関心が高まっている頃に三陸沖大地震が発生しました。鹿児島では九州新幹線開業セミナー前日であったことを今でも鮮明に覚えています。

テレビの映像を見ながら心が震え、作家吉村昭さんの著書三陸大津波の内容とダブリました。目前の映像で起きていることは、自分が生きている今、日本の中で起きていることだと強く感じました。

百数十年前に起きた同じような規模の大津波のあと先人は「高き住居は児孫に和楽 想え惨禍の大津波此処より下に家を建てるな」と後世に記念碑を残している事を思い出しました。

この惨状は直接見て触れて、臭いや風や風景を肌で感じ、この目に焼き付けておくべきだと強く思い被災地へ車で行くことを計画しました。



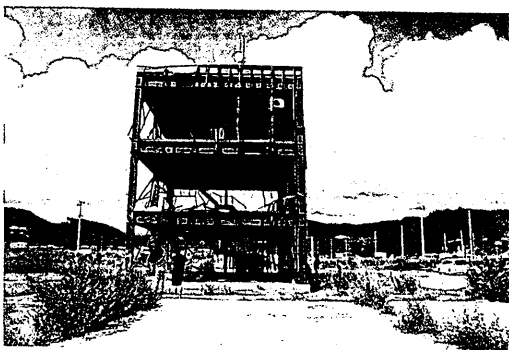


車中泊できるようベッド作りから始めました。車中でパソコンを使えるようアダプターをつけパソコン操作ができるよう助手席にパソコン台、その下を収納スペースに、車の全ての窓は脱着タイプのスモークを作り、パソコンでドライブシュミレーションし安全な宿泊場所など検討しました。ボランティアセンターに届ける飲料水を積み込み、混雑を避けるため五月の連休明けに出発しました。

新潟から福島間の高速道は自衛隊の救援車両、消防車、救急車に加え仮設住宅建設用の材料等を載せたトラックの隊列が続き前後左右を囲まれ、又道路は少しづつうねり始め、陥没の段差が現れ運転しながら緊張が高まり被災地へ近づいている事をひしひしと感じました。

蔵王には雪が残り、まだ車外は肌寒く2か月たった被災者の置かれた立場を感じました。

宮城県阿武隈川の近くまで来ると景色は一変し、高速道路が津波の防潮堤にはなりましたが、一般道が通るため高速道の下がトンネルになっている場所に津波が集中し一気に町中へ駆け上がっ



てきた様子がよく分かります。仙台空港付近の美しい松林から内陸の家屋は崩壊し、新築のような状態に見える家屋も中身は無く、田園には黒いへドロ状のものが堆積、乾燥して固まり、その中には数え切れない程の車、トラクター、冷蔵庫など生活のためのあらゆるものが散乱しています。ボランティアセンターへ飲料水を届け話を聞きました。被災地に入り三日目から爆弾低気圧が接近し激しい雨になり途中で断念。3,800kmの車中泊撮影の旅でした。

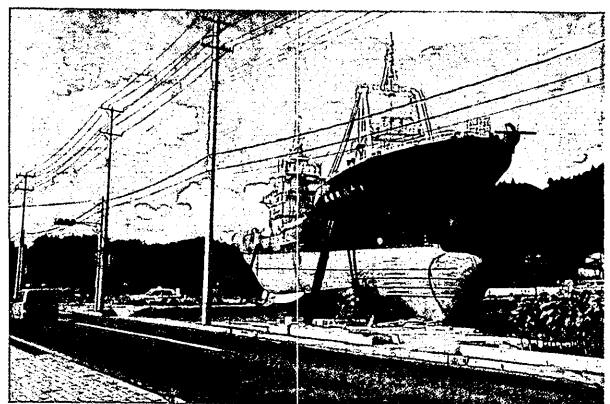
先人の記念碑を直接見れなかった悔しさが募り翌年の9月2回目の被災地行。秋田から岩手県宮古市北の本川へ入りました。

重茂半島姉吉漁港にある大津波記念碑を見たときは先人の魂を痛烈に感じました。孫子を守りたい願いがそこに残っていたからです。やがて便利さ、効率を優先し守られることは少なく各地で多くの犠牲者が出ました。

釜石、大船渡、陸前高田、気仙沼と撮影し南三陸町では伊佐市から派遣されている若者に直接会うことが出来、苦労話を聞き持参した焼酎を渡しました。最後の石巻まで撮影の旅は続き、困った事と言えば、ナビにない道が増えていたり、ナビにあるガソリンスタンドが無かったり食堂、レストランが無い事でしたが被災者の立場が頭をよぎりました。

基礎だけ残っている家屋の跡に持ち主が植えたであろう夏花が「諦めていないよ」と主張するかの様に咲いていたことが印象的で2回目5,000 kmの撮影の旅は終わりました。

自然の大切さと自然の力を考えるこの頃です。



写真＝上は気仙沼市 第十八共徳丸

《投稿》 「積極的交戦主義」では？

図 師 博 隆

第二次安倍政権が誕生して一年後の、昨年末、内閣に国防・外交・安全保障の司令塔となる「国家安全保障会議（日本版 NSC）」が創設された。さらには、戦前の軍機保護法や治安維持法を想起させる「特定秘密保護法」を、国会で数の力により強行成立させた。反対意見をかわすため、秘密指定の妥当性を監視する機関を内閣府にいくつか置くことを示したが、構成メンバーは“身内”の官僚などで、独立した公正な立場からのチェック・制止機能はない。秘密指定やそれに伴う処罰は、時の権力が恣意的に出来る余地を残している。

その後も、「武器輸出（禁止）三原則」の例外として、南スーダンに PKO で活動する韓国軍に銃弾一万発を無償で譲渡することを閣議決定した。また、戦時体制を前提として「離島」防衛を想定し、船舶業界と輸送協力の事前協定を結ぶ必要性を明記した「機動展開構想」のあることが、新年になって早速 5 日判明した。そこに言う「予備自衛官」とは元自衛官経験者らしいが、現在の民間船舶の乗組員でも一定の訓練を受けて予備自衛官補として任用されるという。まるで、にわか徴兵ではないのか？

これらの動きは、安倍首相が唱えるキャッチコピー「積極的平和主義」という“ことば”とは真逆で、彼が主張する集団的自衛権行使の容認も含めて、国民を戦争に巻き込む方向ではないか？ “平和”という用語が空々しい。内実はむしろ「積極的交戦主義」と言い直すべきだと思う。

1/24（金）第 186 通常国会の施政方針演説で、安倍首相は「フィリピンの台風被害の救援に 1,200 人規模の自衛隊員を派遣したこと」・「アデン湾で海賊対処行動にあたる自衛隊、海上保安庁」・「ODA（政府開発機構）60 周年」・「シリアでの化学兵器廃棄に協力」・「イランの核問題で平和的解決に向けた独自の働きかけ」など挙げて、こうした活動の全てが、世界の平和と安全に貢献すると言い、これが「積極的平和主義」ですと言う。この中で派遣された自衛隊員一人ひとりの人命救助をはじめとした災害救助の尽力を否定はしないが、むしろこれは組織的訓練

を活かした平時の武器を使わない人道的貢献として当然の活動であって、国内での災害救助の働きの延長である。殊さら「積極的平和主義」と喧伝することではない。いざ戦時となれば、命令一下軍隊として本来の任務の牙を剥くことになるはずである。「自衛隊」（自民党の改憲案では「国防軍」）に代わって、軍備なしで日常専門的に訓練し鍛えている全国的組織の「災害救助隊（レスキュー隊?）」を創ればその派遣で済むことである。現実的対応としてやむを得ないけれど、そして隊員には申し訳ないが、国内外を問わず「自衛隊」派遣には「衣の下で鎧」が見え隠れする。棘を抜いた「自衛隊」を国民の中に馴染ませようとする意図も見え隠れする。

「戦後 68 年間守り続けてきた我が国の平和国家としての歩みは今後とも変わることはありません。」と述べている。この 68 年間確かに日本は戦争に少なくとも直接かかわることを避けることにより、一人の自国民も他国民も殺し殺されることはなかった。それを日米安保条約のお蔭だと安倍首相は言いたいのだろうけど、否それは、まさに日本国憲法前文並びに九条の「不戦の誓い」が、いろいろな局面で歯止めをかけてきたからであることは、万人の認めるところである。安倍政権は、集団的自衛権の行使を容認することにより、その九条を無きものにし、国際協調主義を隠れ蓑に日米（軍事）同盟を実質、より強固なものにして米国の傘下で戦うことで、国民が 68 年間守り続けてきたこの平和国家としての歩みを、むしろ壊し、国民を再び戦争の危機に巻き込もうとしているのではないか。

次の動きも、「交戦主義」と言うにあたる。尖閣諸島領有権問題は、先に石原前都知事に上手く乗せられて野田前内閣が国有化したところから、中国政府や台湾漁民が刺激され新たな示威行為をして緊張が高まって来たように感じる。そんな中で安倍首相が昨年末唐突に敢えて靖国神社を参拝したことだ。靖国神社は、自国への侵略戦争をリードした A 級戦犯を英霊として合祀し、その戦争を「大東亜戦争」と称して今なお正当化している所だとして、特に中

国・韓国の政府・国民が抗議してくることを解っていないながら、いわば確信犯的に挑発している。「国を守って亡くなった人々の御霊を礼拝して何が悪い？」と居直っている。前は霊前に「不戦を誓っている。」と言い逃れていたが、今は自民党の方針からもその言葉は消えたと聞く。相手が怒っているいろいろ反論してくることを誘いながら、それを軍備強化（たとえば、12/17（金）閣議決定した「防衛計画の大綱」のなかに、「離島奪還を担う部隊創設」を明記する）など、戦争につながる状況づくりの好個の口実にする。むしろ「好戦主義」と言った方がよりふさわしいかもしれない。しかもアメリカやヨーロッパが「失望」の意を表したのに対し、説明すれば解ってくれるはずだとうそぶいている。

前述の「特定秘密保護法」の施行に向けて、1/17（金）に「情報保全諮問会議」が発足した。首相官邸で開かれた会議で安倍首相は「いただいた意見はしっかり受け止め、運営基準を策定する。」と口先だけは神妙に挨拶したが、翌日付の『南日本新聞』によれば、「会議は秘密の中身を検証する権限がなく、運用基準に関する議論も首相への『助言』にとどまる。同法に批判的なメンバーもい

るが、あくまでも少数派。制度の“暴走”を防ぐ役割をどこまで果たせるか疑問が残る。」ということである。諮問会議で出た意見を採用するかどうかは時の首相の判断に委ねられる。

首相をはじめ、少なくとも今の内閣が信じられない一つは、昨年末の国会審議では「法成立後も秘密指定のあり方などを再検討する」と表明した森雅子

内閣府特命担当相が、同日（17・金）日本記者クラブでの会見では「秘密保護制度見直しのための法改正は困難」との認識を表明したということだ。成立させてしまえば、もうこちらのもの、ということか。

ちなみに、新聞の同じページに「1992～93年にフランスから日本へプルトニウムを船で輸送した際、当時の科学技術庁や動燃（動力炉・核燃料開発事業団）が、①港や船の名前を非公開とすることを秘密裏に決める一方、②報道機関に虚偽の説明（入港地が茨城県東海村と決まった後も『関知していない』との姿勢を通す）をしたり、③非公式に情報を（予め箝口令を敷いて、東海村の有力村会議員だけに）漏らす方法を検討したりしていたことを示す内部資料が明らかになった。」「核兵器の材料になるプルトニウムをテロから守るとの理由で、官僚が情報の恣意的な扱いをしていたことを示す例と言える。」とあった。実際には、フランス側が船や港の名前を公表し、日本も方針変更を迫られたという。

安倍首相は、原発情報が特定秘密に指定されることはありえないと大見得を切っているけれど、上の例は「特定秘密保護法」成立の今から20年前の話である。もしこの法が施行されるようになれば、このような恣意的運用がますます公然と行われるようになるだろう。また、この内部資料は動燃関係者が保存していたらしいが、そこから漏れたとすれば「特定秘密保護法」に照らすと、関係者は何らかの罰を受けることになるのだろう。国民がもの言えぬ薄ら寒い戦前の足音がまた迫りつつあるのを感じる。

2014、1、2（日）記

学校は今 定時制の窓から⑧

開陽高校定時制課程分会 森 徹

「先生にいくつかのアドバイスをしたいと思っています」

開陽高校に赴任して初めての「教職員評価」の「面談」は、教頭のこの言葉で始まりました。「アドバイス」の内容は憶えていませんが、「アドバイス」の言葉は、違和感とともに記憶に残っています。

定時制課程の「教職員評価」は、年度当初にその年度の目標や具体策を書いた「自己申告

書」を提出し、年間3回の「面談」（校長又は総括教頭2回、教頭1回）があり、3回目は「評価」が校長から言い渡されています。

「面談」の内容は、人によって様々です。

今年の私の場合は、「自己申告書」に書かれた事柄の説明を求められたり、学校・生徒の現状を聞かれたり、校長が学校運営についての考えを述べたりでした。3回目の「面談」では「評価に何の意味があるかわかりませんが」と言い

ながら評価を言い渡しました。しかし、肝腎の具体的内容は何故かそのほとんどを憶えていません。

「管理職が一方的に喋っていた」「趣味の話で終わった」等と、「無意味」と感想を漏らす年配の教員から、「学力のきわめて低い生徒に苦勞しているのであればそういう生徒は入試で落としてしまえばよい」と言われ困惑している若い教員もいます。

一方ここ2・3年少し気になっていることもあります。

「面談」が終わってからの教職員の表情・態度です。

若い教職員を中心に、「面談」終わると頬を上気させ夢見るように校長室から職員室に帰ってきます。さらに翌日からしなくてよい「仕事」までバリバリやり始めるのです。校長から何を言われたのか、「励まされた」のか容易に想像ができます。(勿論組合員や年配の教職員にはそういうことはほとんどありません)

廃止・形骸化をめざしていた「教職員評価」が、組合員の減少とともに、ここにきてその本質を「発揮」しはじめているのかもしれない。

奄美大島日本復帰運動と大島高等学校生の活動

豊 純 輝



昨年12月25日、奄美大島日本復帰60周年記念日を中心に、奄美大島本島をはじめ、全国の奄美関係者が、様々な記念行事を行い、2.2宣言以降の苦しい生活や激しかった日本復帰などについて語られました。

2.2宣言によって本土と分離された奄美では、極度の物資不足生活困窮に襲われ、一日も早い日本復帰を望んでいましたが、軍政府の弾圧を恐れて、公然と日本本土復帰を口にすることはできませんでした。

しかし、1948年4月に配給食料3倍値上げ指令をきっかけに反対運動が起こり、厳しい弾圧を受けながらも、日本復帰協議会が結成され、大島高校学生自治会もその構成メンバーになりました。

大島高校の前身大島中学校は、大島郡唯一の中学校であり、全郡から優秀な若者が集まり、学習に励み、これを指導する先生方も全国各地から赴

任され熱心に教育に当たられました。この先生方が、旧制高等学校の寮歌を模した多くの応援歌を創られ、運動会や対校試合に歌われ士気を鼓舞したものでした。中でも当時校歌に代わって歌われた「あゝ安陵を愛すべし」で始まる愛唱歌は、奨学、勤労、社会貢献を説き、生徒の精神のバックボーンともなるものでした。

このような中から、進取の気性に富んだ若者が育ち、教材文具の不足の中でも学習に励み、部活動にも熱心に取り組みました。特に文芸部の活動は目覚ましく、演劇研究発表会は多くの市民が見物に来る恒例行事になっていました。この文芸部や社会科学部研究部のメンバーが、学生自治会(生徒会ではなく学生自治会と言っていました)の役員となり、復帰協議会の構成員となりました。

復帰協議会の最初の事業は全郡民から日本復帰請願署名を集めることでしたが、事務局体制が完全ではない中で、署名の点検集計を私たち大高生が手伝い、1951年2月19日から3月末までの2か月足らずで、14歳以上の郡民の99.8%の署名を集めることができました。

1951年7月14日、復協の呼びかけによる市民総決起集会には、小中高生を含む市民多数が参加、軍政官の中止指令を変更させ(小学生退場、デモ中止、プラカード撤去の条件付き)名瀬小学校校庭を埋めつくす大集会となりました。

大会終了後大高自治会は、撤去させられたプラカードを掲げ、わざわざ遠回りして行進、市民の声援の中「信託統治絶対反対」「聞け民族の血の叫び」「日本復帰完徹」などのシュプレッヒコールを繰り返しながら実質デモ行進を敢行帰校しました（写真＝前ページ）。このことがきっかけとなり、以後行われた決起集会後は公然とデモ行進するようになりました。



「奄美のガンジー」と呼ばれた泉芳朗議長の5日間の「日本復帰祈願断食」に呼応して、私たち高校生を含む多くの市民は、泉議長断食最後の日に24時間の断食を決行しました。

この間私たち大高自治会は、復協の要請を受けて、集会の呼びかけ、復帰運動の意義の訴え等の街宣の手伝いなどをし、夜にはこのための学習会などもしました。

このことから、軍政府の情報官（CIC）から目をつけられ、自治会長の大勝方興君が、学校を通じて呼び出され尋問を受けることもありました。（中身は他愛もないことであったと大勝君は言っていました）。その際私も呼び出されそうになったのを顧問の佐藤圭治先生が「その必要はない」と断ったということを復帰後佐藤先生から聞きました。

このような運動の高まりの中、名瀬市議補選で社民党市議3人当選（合わせて4人）、笠利地区の立法院議員やり直し選挙での中村安太郎氏の当選（米軍の激しい選挙干渉があったにもかかわらず）泉議長の名瀬市長当選など、奄美大島郡民が米軍政府のコントロールがきかない状況になっていました。この激しい復帰運動の結果、銃剣とブルドーザーで沖縄の土地を奪い、沖縄の永久軍事基地化を目指していた米軍は、奄美の運動が沖縄に飛び火することを恐れ、ついに1953年8

月8日の「ダレス声明により奄美群島を日本に返すことになりました。

奄美の日本復帰運動は単に経済的豊かさだけを求めたものではなく、「日本復帰の歌」にあるように、「平和と自由」を希求し、民族の誇りを守るため屈辱的な「信託的統治」に反対し、「民族自決独立」という理想を実現し、平和憲法のもとに沖縄の人々とともに日本へ帰ろうという高い思想性を持った運動でもありました。

私は高校生という多感な青春時代にこの運動に参加できたことに誇りを持ち、その後の人生の方向を定めたと思っています。80歳を超えた現在もその頃の思想を持ち続けております。

ただ残念なことは、日本復帰が実現するかに見えてきた頃「革新同志会」と名乗る者たちが血の出るような努力を重ねて復帰運動を構築してきた人々を、復帰運動の中心から追い出し「平和条約3条撤廃」のスローガンを下ろしたことでした。このことが復帰後の国会議員選挙で、復帰運動に最も力を尽くした泉芳朗議長ではなく、他の利益団体の者を選び、振興事業の利権争いのもとになりました。

復帰運動の高い思想性が失われたことにより、その後の選挙では利益誘導と選挙違反の繰り返しと選挙賭博という忌まわしいことまで起こり、果ては国会議員の失職という辱かしい事態にまでなっていました。

また、現在沖縄の基地負担の軽減という名目で日本全体が沖縄化されようとしていることに、奄美の復帰運動のスローガンの一つ「対日講和条約3条撤廃」がいかに正しかったかが証明されているように思います。



写真＝上 大島高校文芸部の生徒・1951年

日退教九ブロ第 23 回研修会・第 36 回定期総会開催

3月5日(木)・6日(金) 佐賀市 グランドはがくれ

高退教会長 長井玄龍

体力、費用の関係で2泊3日が1泊2日の日程になった2回目の総会・研修会です。慌ただしい日程ですが、この日程に慣れてきた感じもあります。今回は第2分科会に図師博隆さん、第3分科会に吉永裕子さん、第1分科会に長井が出席しました。

第36回定期総会

佐賀退教協の会長は上芝正子先生、事務局長は井上雅子先生、お二人が窮屈な日程のこの集會を他の役員運営委員と共にてきぱきと運営進行され見事でした。

西澤日退教会長の中央情勢報告で、田母神氏が先の都知事選で60万票からの支持を受けたことに関し、私たちの陣営が、現政権の「愛国心」キャンペーンに対峙できる、思想・方針を主張できなかった事にもよると言う分析がなされた。確かに偏狭なナショナリズム、政権担当政党の保身擁護のためだけの「愛国心」ではなく、自国も愛し、他国も愛する相思相愛の愛国心とか、一部の政財官の、政財官による、政財官のための、国家ではない愛国心とか、私たちの愛国心を分かりやすい言葉で表現する必要性があるなどと思った。

総会で大会宣言と共に「文科省による竹富町教委への不当な「是正要求」に抗議し撤回を求める決議」と「民意を踏みにじり、辺野古新基地建設を図る日米両政府に抗議する決議」が採択されました。

写真＝上芝正子会長開会あいさつ



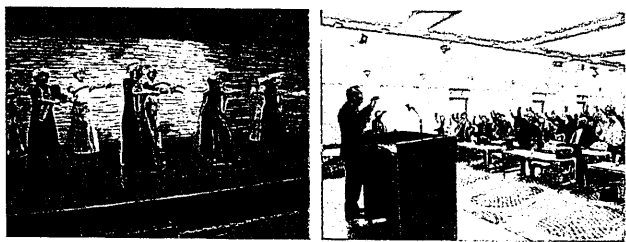
この九ブロの研修会・総会は、次年度は長崎県で行われます。

第1分科会 組織の強化拡大

長崎県退教協の問題提起を受けて議論がありました。今年度の話題は

- ① 再任用者の会員化の問題でした。再任用者が増えそのまま現職組合員として組合費を納入していますが、両方の会員として、退教は会費を徴収しないとしている県・高が大半でした。再任用制度でいつの時点で退職になったかが曖昧になり、節目設定に苦慮する悩みが共通しています。
- ② 会員拡大で、入って何かメリットがありますか、と問われる。会費を出し、時には労力を提供しなければならない。むしろこれはデメリットだ。メリットはと問われると、レクリエーションや各種集まりなど通して人とつながり、会員として全国の退職者と連携して日本の平和に寄与している、脱原発で子や孫に負の遺産を残さない運動に連帯しているのだと言う気概と心意気が持てる事、これがまた若干のボケ防止にもなるかと言う事ではないか。
- ③ 退女教の組織が長崎、鹿児島、大分にあり、日退教にも加入していないので、この会にも参加もない。県によっては合同の学習会を開くなど交流はあるが全く別の組織である。ただし運動としてはほぼ日退教の運動と共通している。退女教の方が、設立が早く、女性でなくては解決できない課題もあり、合併の機運ゼロである。
- ④ 現職組合員の減少が進み各県厳しい状況にあるが、選挙活動以外で何かサポートできることはないか。今後の課題である。長崎県退教協は県教研に参加している。
- ⑤ 沖縄県・高退教から一連の反基地闘争に物心両面からの支援と、先の参議院選挙で残念ながら当選を果たせなかったが「山城ヒロジ」への支援に感謝する発言がありました。

写真左＝交流会での佐賀退教協会員のあでやかなフラダンス



写真右上＝次回開催県・長崎退教協会会長坂巻毅治先生の音頭による閉会式での「団結ガンパロウ」

第2分科会 平和・人権・民主主義・環境

〈報告〉図師 博隆

宮崎県退教協の高橋さん「串間に原発を作らせないととりくみ」：1992年2月から今日まで反対連協に加わっての活動。5年後に九電が市への原発立地打診を「白紙撤回」。新たに今、「使用済み

核燃料処分場候補地」の動きが水面下であり油断できない。反原発を市民運動に広めるために労組はどうあるべきか？

熊本高退教の木田さん「不合理には退職しても怒りますよ！」：県教委に再任用を拒否された会員の国家賠償訴訟の闘い。これに習い日教組は再任用の全国の実態を調査し、改善へ向けてとりくんで欲しい。

本県退教協の松下さん「ハンセン病（差別）問題」：ハンセン病患者への国の棄民政策に無批判に乗り積極的に差別に加担し続けた私たち学校職員のあり方を問う。

沖縄県退教協の仲宗根さん「①戦時体験を手記として次世代に残すとりくみ②竹富町教科書採択への文科省の介入問題③『辺野古新基地建設』問題」：この3本の柱を1本のレポートにまとめて日退教集会には沖縄が報告する。

3・16ストップ再稼働！鹿児島大集会

川内は絶滅危惧種ホモサピエンスの最終処分場か

篠原 廣己

前々日から、「まず川内 迫る再稼働」の新聞の大見出しに胸を抉られる思いだったが、今日の集会は晴れて温かかった。原子力規制委員会が3月13日、川内原発1、2号機が新規制基準に適合しているかについて優先的に審査することを決めた。そのことがかなり危機感を与えたのか、参加者は前回よりかなり増えたように思う。主催者発表で、6千名に達する。中央公園は人に埋め尽くされた。ただ、日曜日にも関わらず、壮年層男性より老人たちと女性、子供たちの姿が目立った。それでも、色とり取りに趣向を凝らしたプラカードやグッズ、県内県外のゼッケンが反原発の熱気を盛り上げていた。ところが、横では右翼団体が街宣車で10号線を封鎖するわ、歩道に乗り上げるわ、高音で罵声を浴びせかけ、幾度も威嚇する。警察も遠巻きに見ているだけだった。こんなふうに権力は、我々一般市民を萎縮させていくのだろう。集会のコメントの中に、「原発反対

の人も賛成の人も同じ仲間として原発を、放射能を考えていく必要がある」旨の意見を聞いた。右翼や権力は別として、一般市民はどちらの考え方であれ、同じ仲間として一緒になって、その是非を考える方向は悪くないと思った。（16面に続く）

この審査が終われば、再稼働の法的な前提条件が揃う。ただし、運転には県や薩摩川内市の同意が必要だ。ところが伊藤知事は「6月議会までに容認の議決を終えたい」と言い、岩切川内市長にいたっては「日本で一番安心・安全な原発と理解している」と記者会見で述べた。加えて、知事は、要援護者の避難計画策定を再稼働の要件にしない考えだ。

このまま地元の反対が無ければ、今年の夏にも再稼働することになる。多くの市民の声を無視した知事や市長のゴリ押しに負けないで、県民地元民の反対を明確に大きくすることこそこれからいっそう必要になる。



退職した年寄りにも、働く場はある。先人たちの残した豊かな環境を子どもや孫の世代に残してあげることも、年寄りの大事な仕事ではなかろうか。原発事故以来、このことを痛切に思う。高校退職教職員会の皆さん、どうか原発廃棄に力をお貸しください。手始めに、「原発なくそう！九州川内訴訟」の原告団に加わるのは如何でしょう。

向原祥隆・集会実行委員会事務局長の基調報告。



「川内原発を再稼働の一番手に指名した原子力規制委員会は第一に福島の大事故をまるでなかったかのように

にふるまっている。第二に、規制委員会は再稼働推進のための組織であり、再稼働のためのアリバイ作りの組織であるということがはっきりわかった。第三に、川内原発の地震の危険性を全く無視している。この三つは全く許しがたいことだ。」

九州川内訴訟弁護団長・森雅美弁護士の訴え。

「川内と玄海原発訴訟団員数が合わせて1万人を



超えた。大きな力になると思う。万が一でも原発事故が起こるとおしまいです。だから避難訓練はいらない、無意味だと思っています。」

川内原発建設反対連協・鳥原良子会長の訴え。



「鹿児島県知事・薩摩川内市長は規制基準の審査に通りさえすれば、再稼働をしたいというようなことを言っています。知事は任期終了後は東京に住むつもり

です。そんなトップが鹿児島県の住民の命を愛せるはずがありません。」



※1 現在、「九州川内訴訟」は第五次提訴まで行っており、原告数は2,242名。

3月25日(火)には、第5回口頭弁論が鹿児島地方裁判所で開かれます。



※2 東京を中心に「原発メーカー訴訟」もあります。原発メーカー3社(米GE、日立、東芝)を

相手取り、現在日本国内から1,415人、海外から2,720人(38か国)、合計4,135人が原告となって提訴しています。(鹿児島からは19人)

今後の日程

4月26日(土) 第85回メーデー県中央集会

5月3日(土) 5.3憲法記念日集会

5月23日(金) 第1回高退教拡大役員会

6月28日(土) 2014年度定期総会・懇親会

編集後記 高退教通信に初めてカラー印刷号が誕生しました。全面カラー印刷とまではいきませんでしたが、画期的な出来事です。1面、8・9面、16面の4面分です。そのため当初編集計画を一部変えざるを得ませんでした。お詫びし、お許しをいただきたいと思います。原稿をお寄せいただいた方には厚くお礼を申し上げます。

東日本大震災・福島原発苛酷事故から3年が経過しました。河野先生からは「ヴィーナスの涙」、そして南先生からは伊佐での自然を守る活動報告とともに、東北地方の被災地訪問の報告をいただきました。フクシマのことを決して忘れず、一刻も早い脱原発政策の実現を願わずにはおれません。篠原先生には3.16鹿児島大集会の模様をレポートしてもらいました。川内原発の再稼働を許さない県民の声も大きくなりつつあります。連帯を強めて持続可能な社会を確立するために努力いたしましょう。